

POSTELEにおける組織モデル

3T-6

三木 彬生 後藤 浩一 松原 広
日本国有鉄道 鉄道技術研究所

1. はじめに

現在電子メールシステムは、パソコンネットのBBSとして、オフィスでのワークステーションのメールサーバなどとして構築されているが、これらは機密性、信頼性、機能性の面でオフィス内での利用では十分ではない。一方MHSでは、これらの点では満足できるが基本的に広域での個人間通信が目的であるため、必ずしもオフィスの組織モデルをサポートするのに都合が良くない。オフィスでは部所そのものに対する配送や、本人ではなく庶務が取り扱うべきものや宛先自身もあいまいな場合が多い。またオフィス文書の処理そのものも、この組織構成と密接に関係している。更に企業内では、プロジェクト等、定常的な組織とは別に一時的に組織することが多々あり、それらの対応も問題となろう。オフィスで使用される電子メールシステムをより実用的なものとするために、これらの問題を踏まえた組織モデルを確立し、適切な文書伝達を行う必要がある。

2. 組織モデルの階層化

企業における組織をモデル化するに当たっては、基本的に階層的なツリー構造で良いことがわかる。組織構造の例を図-1に示す。

ここで問題となるのは、(1)所属そのものに対する配送、(2)各長殿といった一見個人宛でありながら、

実は組織宛のもの、(3)この組織体制を越えたプロジェクトに対するものなどがある。MHSでは、宛先となるO/Rネームの構成として、以下の3方法を勧告している。

①基本属性(CountryName, AdministrationDomainName)にPRMD(PrivateDomainName)、個人名(PersonalName)、組織名(OrganizationName)、部局名(OrganizationUnitName)およびMD個別属性(Domain-defined attributes)のいずれかを組合せて使用する。

②基本属性とUAユニーク数字識別子(UA unique numeric ID)を使用する。なおMD個別属性を使用しても良い。

③基本属性とX.121アドレスを用いる。②と同様MD個別属性は使用しても良い。これは、テレマティック端末への配送を目的としている。

オフィス内での適用を考えると①を採用にすることとなりそうであるが、個人名、組織名、部局名とを別々に意識しているので、例えばxx御中であるとか、第一係長殿といった属性に対する配送は、組織名と部局名と個人名の対応の問題が発生し、複雑になる恐れがある。また各課長殿といった属性に対する配送は、組織属性でPositionOrRoleとして、項目としては上げているが、サポートしておらず、実現手段の提案もしていない。

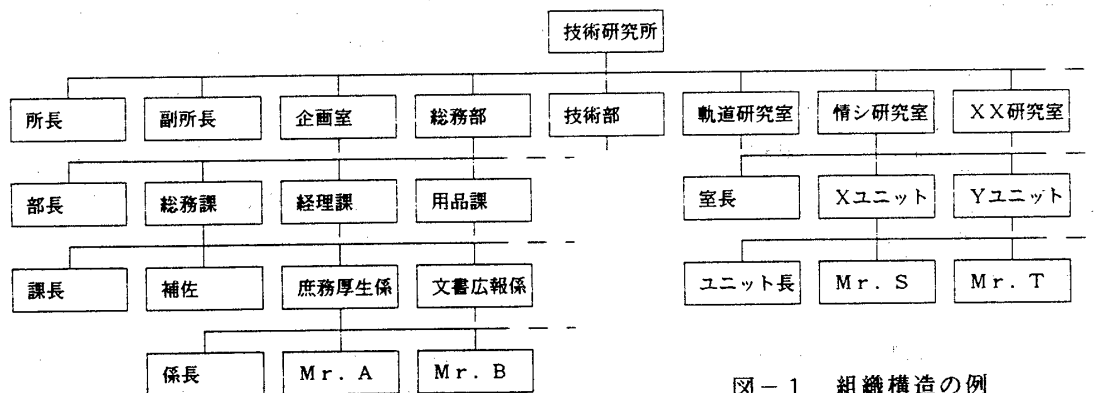


図-1 組織構造の例

The Office Organization Model in POSTELE
Shigeo MIKI, Koichi GOTO, Hiroshi MATSUBARA
Railway Technical Research Institute, JNR

オフィスで使用するO/Rネームを考えると、使い易さを第一にすれば、ユーザにはこれらのフィールドを個別に意識させるべきではないと考えられる。MHSで使用している基本属性は、そのまま採用することとし、それ以外のものを一つのフィールドとして扱い、そのフィールドに組織モデルに対応した階層的記述をとる方式を考えた。これにより、ユーザは組織名とか部局名などといったフィールドを意識することなく、O/Rネームを記述することが可能となり、より柔軟に宛先の表現ができるようになった。また不完全O/Rネームから識別する過程においても、各フィールドの制限によらずに認識することが可能である。

3. 所属に対するサポート

端末のUAに対しては、階層表現によるO/Rネームにより、配送することとした。しかし、オフィス文書での宛先はxx御中といった、取扱者が不明の組織そのものへの配送がありえる。図-1での組織構成をみると、部所(ノード)そのものへの配送ということになる。これをサポートするために、各々の個人に加えて部所に対応するノードに対してもUAを設ける体系をとった。この概念を図-2に示す。このUAは、いわゆるその部所における庶務を担当するものが扱うことが原則となろう。これにより、組織名があたかも個人名としての記述が可能になる。例えば、以下に示す配送ができる。

①所属に対する配送:

xx会社営業部第一課御中

②所属長に対する配送:

xx会社営業部第一課長殿

③所属メンバへの配送:

xx会社営業部第一課御一同様

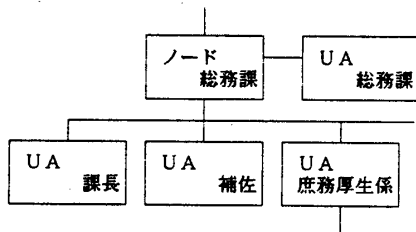


図-2 ノードに対するUAの設置

4. 属性に対するサポート

個人のUAが電子メールシステムに加入する際、その組織構成に則った属性(部長, 課長等)をMTAに登録することにより、属性に対するサポートを

行う。すなわち、MTAは加入UAテーブルとは別に属性登録テーブルを持ち、両者どちらかでもお互いに参照できるようになっている。この概念を図-3に示す。

これにより宛先として、属性そのものに対する配送が可能になる。例えば以下に示す配送ができる。

①属性メンバに対する配送:

xx会社営業部各係長殿

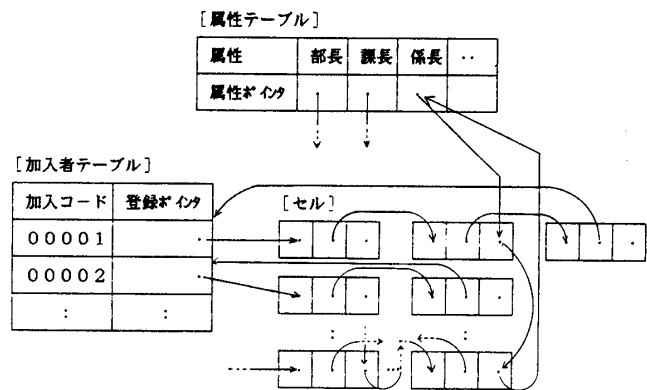


図-3 属性に対するサポート方式

5. プロジェクトに対するサポート

定常的な組織とは別に、一時的な組織が存在し、そのメンバが定常的な組織上に登録されておりながら、更にプロジェクトのメンバであるといった場合が考えられる。その場合オフィス文書は、そのプロジェクトに向けたものであったり、そのプロジェクトの中の1メンバに対するものであったりする。これを実現するために、個人用のUAと同様に、組織のツリー構造の中にグループ用のUAを設け、そのUAはグループに所属している個人のUAを管理するテーブルを持つ構成をとった。これにより、例えば以下に示す配送が可能である。

①プロジェクトに対する配送:

xx会社第一プロジェクト御中

②プロジェクト内にメンバに対する配送:

xx会社第一プロジェクトMr.X殿

(Mr.Xは営業部第一課に属している)

6. おわりに

思想的にMHSに準拠しながらも、企業の組織形態に合わせたO/Rネームの構築法の検討を行い、それを実現した。更にPOSTELEでは、対MHSとの通信を考慮し、MHS準拠のO/Rネーム記述もできるように配慮している。今後は更に実用化に向けての細部の検討を進めていきたい。